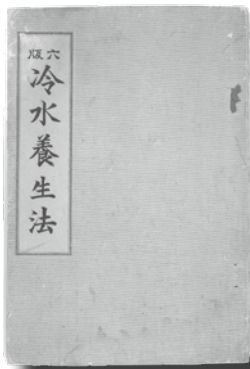


東京大学史史料室ニュース

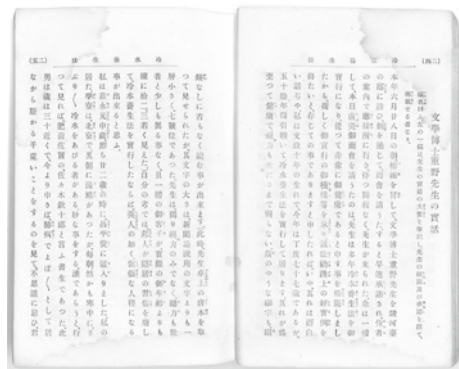
第50号 2013・3・31

目次

百年史編集と史料収集—室長土田直鎮先生の「アーカイブ構築」の思い—…………… 2
 史料にみる学生生徒—学習院アーカイブズ所蔵史料から—…………… 4
 受贈図書一覧（抄）…………… 6
 史料室日誌抄録…………… 8



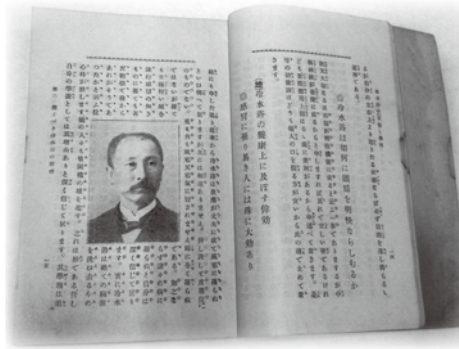
『冷水養生法』六版（1906年）



井上哲次郎と親交のあったとされる重野安繹（1827-1910年）
 の話掲載部分（『文学博士重野先生の実話』（『冷水養生法』））



『冷水浴の実験と学理』（1907年）



駒場農学校第1期生で農学者である玉利喜造（1856-1931年）
 の写真掲載部分（『冷水浴の実験と学理』）

所蔵史料の紹介

現在、翻刻作業を進めている井上哲次郎の日記『巽軒日記』などでも言及されている、冷水養生・冷水浴健康法については、当時著名な知識人らにも広く影響を与えていたものと思われる。たとえば、『巽軒日記』の1907（明治40）年7月21日では「夜、『冷水養生法』を読む」とあり、同月23日には「冷水浴を始む」と記されている。

同上書2冊、『冷水養生法』と『冷水浴の実験と学理』は、室員寄贈である。『冷水養生法』には、歴史学者・重野安繹の実話「廿四歳より七十七歳に至る今日まで、五十四ヶ年の間、引続いて冷水養生法を実行法してをるから、常に精神が爽快で、一日も不気分の事なく、至つて健康であります。」（27頁）なども所収されている。

百年史編集と史料収集 —室長土田直鎮先生の「アーカイブ構築」への思い—

小川千代子

東京大学史料室ニュースNo.50と史料室の引越し2012-2013

東京大学史料室ニュース No.50に際し、投稿というご依頼を頂いたのは、2012年5月だった。2012年11月、東京大学史料室（以下史料室）は1975年以来住み慣れた安田講堂5階を離れ、本郷キャンパスの医学部一号館1階に引越した。安田講堂の耐震工事に当たり、柏キャンパスにも大規模な書庫を設けると仄聞する。史料室の資料は当分は本郷キャンパスと柏キャンパスでの分散管理となるようだ。そこで、この機会に、安田講堂5階の史料室という「場所」に蓄積された資料をめぐる思い出を綴ることでご依頼の責めをふさぎたい。

編集室から史料室へ＝編集室史料から東京大学史資料へ 1975-1987

1987年3月、12年余にわたった東京大学百年史編集事業は『東京大学百年史』全10巻が刊行され完了した。編集担当の東京大学百年史編集室（以下編集室）は、事業の完了とともにその役割を終えた。

編集室のスタートは1975年4月、全10巻の『東京大学百年史』の最初の一冊が発行されたのは1984年3月9日であった。この日、編集室では土田直鎮前室長以下20人ほどが集まり「祝宴」が催された。この時の記念のダルマは今も史料室に保管されている（写真）。



百年史第1冊刊行記念のダルマ
〔1984年3月9日開眼〕の文字
は土田直鎮前室長の直筆。

話がそれてしまった。編集室が百年史編集過程で収集した東京大学関係資料は、1987年3月頃に計測したところ、紙のものだけで積み上げたら800mにもなろうというほどの分量になっていた。編集室閉室直後の1987年4月、百年史編集過程で収集された史料の保存管理を目的に史料室が発足、以来4半世紀が経過した。

史料の収集経過は紀要の彙報欄 1978-1987

編集室時代に収集され、史料室に引き継がれた資料のあらまは、『東京大学史紀要』¹（以下紀要）1～6号彙報欄の記述で知ることができる。なぜ、紀要の彙報の記述なのかというと、編集室時代に収集された資料それぞれの由来や収集経過は、紀要1～6号の巻末彙報に記されているからだ。彙報は編集室における事業の概要を項目別に記し、その項目には「資料収集」、〈編集基礎作業〉、〈研究成果の発表〉等々がある。

編集室の資料、それはいくつもの塊（かたまり）（これを最近では「資料群」と呼ぶことが多い）から成る。一つ一つの資料群はそれぞれに独自の来歴がある。紀要の彙報には毎号「資料収集」、〈編集基礎作業〉、〈編集刊行作業〉、〈編集作業〉、〈研究活動〉などの小見出しのもとに、資料群ごとに簡単な収集経過が記されている。こうして改めて紀要を読んでみると、編集室に蓄積された資料の全てが収集された資料群ではないことも見えてくる。編集室開設時に「そこにあった」改革委員会収集図書や毎年予算で購入したり寄贈をうけたりで蓄積された「図書資料」、編集上の必要で文献から部分的にコピーしたものをテーマごとにフラットファイルに綴じ込んだ「ファイル」資料、編集作業の中で作成された年表基本カードによる年表事項のカード群、評議会記録の議事録をカードに整理した評議会記録のカード群、百年史を作成する過程で原稿をタイプ印字で作成した「タイプ稿」や東京大学史資料目録のような印刷物など、形

状や来歴がそれぞれ異なる多種多様な資料群が、百年史編集事業のなかで生成蓄積されていた。彙報には、こうしたものの来歴が網羅的に記されている。

なお、紀要6号には「特集・百年史編集をふりかえる」で関係者のエッセイと百年史編集室関係資料として会議資料、図書分類表、ファイルリスト、室員名簿、規則集、資料収集年表などがまとめられている。さらに、紀要5号では「特集・百年史編纂と大学図書館」中の「東京大学百年史編集室の活動と刊行物」に、編集室が1975年から1986年までに発行した刊行物が網羅的にリストアップされている。これからは史料室所蔵資料の検索手段として大いに役立つ情報源であろう。

大久保先生の存在—東京帝国大学五十年史²の編集担当者で 百年史編集委員 1925-1975

百年史編集は、1974年度にスタートした。1975年4月からは、常勤室員2名とアルバイトの大学院生で仕事が始まった。最初は一人だったアルバイトは次第に増加し、ピーク時には10数名に達したこともあった。

1975年4月、編集室の開室を記念して、ささやかな会合が、安田講堂5階西側の一室で開催された。ここに、一人の白髪の老人が現れた。凜とした雰囲気その人は語った。

「私は今年喜寿を迎えます。今から50年前に私は『東京帝国大学五十年史』上下2冊を編集しました。今度は100年史ですから、史料収集のお手伝いをしたいと思います。」

その人は大久保利謙先生³という方で当時75才、五十年史のころは28歳だったようだ。

大久保先生はその言葉どおり、ほどなく麹町の加藤さんに連絡を取り、加藤弘之帝大総長の日記、金銭出納帳などが編集室に寄贈された。その後も麹町の加藤さん宅からは「こんなものもありました」という連絡が入り、文書史料の他に数点の陣笠も寄託された⁴。

これを皮切りに、編集室では東京大学に関わる個人所蔵の文書資料の寄贈を受け、それを百年史編集に用いるという資料収集と編集事業の連携の仕組みが出来上がった。分量の大きなものとしては、第18代総長内田祥三の文書が印象深い。この他にも歴代の総長経験者及びその遺族を頼って、関係史料の有無をたずね、史料の寄贈を受けることは度々であった。山川健次郎総長の手紙（卷子仕立て）を寄贈したい、ということで、冬の寒い日に原蔵者のお宅に伺ったこともあった。この資料収集の伝統は史料室にも引き継がれたようである。2012年11月の引越し直前の安田講堂5階東側の部屋には個人文書が収納された文書保存箱が大量に集約されていた。

室長、土田直鎮先生が抱いた「東京大学アーカイブ構築」への 思い1977-1983

筆者が過ごした編集室での12年のうち、1977～1983の6年間、室長は土田直鎮先生⁵だった。そこで、土田先生のことを少し記しておきたい。土田先生（前節では土田室長としたが、普段は「土田先生」と呼びならわしていたので、本節では土田先生と記す。）は1977年4月から1983年3月まで6年間、編集室長を務められた。その間、編集室を大学アーカイブに移行させたいという考えを抱かっていた。その思いは、昭和53年2月創刊の『東京大学史紀要』冒頭におかれた土田先生の「創刊の辞」によく表れている。

「東京大学の歴史の調査は、数冊の百年史の刊行によって終了するものではあり得ない。それは近代史の重要な一分野として、今後の

調査研究の成果をも含めて、恒久的にその充実と研究とが図られるべき学術上の問題である。」

東京大学百年史全10巻の刊行を以てしても、東京大学の歴史が終わるわけではない、当時の編集関係者、とりわけプロジェクトの推進と完了を目指す事務局側の担当者をのけぞらせるような土田先生の言葉であった。土田先生は間違いなく、編集室が収集した史料をもとに、東京大学に学術アーカイブを構築しようとする意図を持っておられたのである。

このように、紀要の創刊の辞で、土田先生は開室満3年を迎えなお先行き不透明であった当時の百年史編集業務の現状をはるかに見渡し、その終了後をにらみつつ、東大の歩みは継続的に（資料収集の）充実と研究が図られるべきであることを述べられた。また、編集室時代に発行された最後の紀要、第6号では「…日本の近現代における大学、特に東京大学の存在の意義を考えるならば、東京大学に関してこれまで残された史料を収集・整理し、さらに今後も系統的に史料を保存・整理の上活用していくことは、東京大学が学術上果たすべき義務であるといっても良い。」⁶とも述べておられる。これらを見ると、昨今の表現で言うなら、土田先生は百年史の終了を待たず、早くから東京大学の「大学アーカイブ構築」を構想しておられたことがよくわかる。

先にも述べた通り、土田直鎮先生は1977年から1983年までの6年間、東京大学百年史編集委員長を務められ、同時に編集室長として編集室を統べておられた。編集室の発足は1975年、百年史の最初の1冊が刊行されるまでには、9年を要した。1984年3月9日（前頁だるまの写真の日付）の刊行にこぎつけるまでの、成果が見えない「長いトンネル」を若い執筆員や中堅の教官を束ねつつ歩む6年間、土田先生が経験された編集委員長と室長の立場はさぞ苦勞の多いものであっただろう。土田先生は——山川とどこか通じる——堅物で真面目な印象の方であった。毎年開かれる全学編集委員会の場では、成果の見えない編集室の活動経過の説明に腐心されていたようにお見受けしたが、編集室ではそんな苦勞の片鱗も私たちに見せることはなかった。

大河ドラマ「八重の桜」と山川健次郎総長と土田先生と…2013～

ところで、大きく話が飛ぶが、第6代及び第9代東京帝国大学総長を務めた山川健次郎が、2013年1月スタートのNHK大河ドラマ、「八重の桜」に登場する。山川健次郎といえば、一般には会津の出身、白虎隊の生き残り、日本最初の理学博士の一人、などが知られている。東大の歴史のなかでは東大総長を2回、合計10年以上も務めただけでなく、九州帝国大学の総長に就任、さらには2度目の東大総長時代には京都帝大総長を兼務した人で、いくなれば大学運営のプロだった。妹は鹿鳴館の花と言われた大山捨松、山川本人も整った風貌の写真が多く残る。

筆者にとって山川総長は『男爵山川先生伝』⁷という昭和前期に発行された伝記で知るのみの存在であったので、この大河ドラマに登場することを知ったときには、意外の思いがあった。山川は、伝記から見た限りでは、堅物で、真面目で、昔のおじいさんのように多分言葉が少なく、取り付くシマもないような人物と感じられたからである。「泣きムシの青瓢箪」などとNHKの解説にのべられたような幼少の頃の山川健次郎像はどこから来たものなのだろうか。

その大河ドラマ「八重の桜」の底流にある「什の掟」では、「ならぬことはならぬ」のフレーズがキャッチコピーにもなっている。この「ならぬことはならぬ」の教えは山川も学んだ会津藩校日新館の生徒が毎日学んだ「童子訓」にある。これが『日新館童子訓』⁸という書物として出版されていること、その現代語訳著者が土田直鎮先生であることを、編集室時代以来の友人に教えられたのはつい最近のことだった。

『日新館童子訓』にある土田先生の解説文は1984年3月の日付があるから、これは編集室を離れた後にまとめられたものである。解説文には、土田先生と日新館童子訓と山川との因縁とも言うべき関わりが述べられている。曰く、山川が東京帝大の総長だったころ、土田先生のご尊父土田誠一氏が学生監として仕えたこと、土田先生のご母堂は会津の出身であり、日新館童子訓の教えの下で育っていたことなど。土田先生ご自身は会津の出身ではないが、日新館童子訓の教えの下で成長したご母堂と山川に仕えたご尊父の子供として、土田先生もまた日新館童子訓「什の掟」の教えが刷り込まれていると感じる、という趣旨のことが簡潔な表現で述べられていた。

むすび

今になって、土田先生の質素で質実剛健な生活態度が、編集室のメンバーにもじわりと浸透していたと思う。その教えが身に付いたとは言ってもおこがましいが、その雰囲気に触れる機会を得て「什の掟」「ならぬものはならぬ」とする筋の通った人生の過ごし方に、改めて今魅力を感じ直している。この筋の通った人生の過ごし方は、私利私欲を排し、常に公（おおよけ）に奉仕しようとする資料保存利用機関のあり方を考えるときの「モノサシ」である。

今、史料室に引き継がれた資料たちはこの先どのように公の資料として長く残され、役立てられていくのだろうか。筆者は、百年史編集過程で収集され、以来25年史料室に集約されてきた東京大学史料が、これからのあゆみの中で公文書管理法という特定歴史公文書等として一日も早く適切な制度と環境のもとで、35年前に土田先生が思いを致しておられた「東京大学アーカイブ」として構築され、その存在意義を広く発揮するよう、切に願っている。土田先生も、もしかしたら山川総長も、きっと空の高みから東京大学アーカイブの構築を注意深く見守ってくださっていることだろう。

末筆ながら、東京大学史料室ニュースNo.50発行に際し、史料室のますますのご発展を祈り上げます。

（おがわ ちよこ：国際資料研究所、情報学環講師）

¹『東京大学史紀要』第1号は昭和52年度末に発行され、第3号までは毎年発行された。しかし、第4～5号の発行は間遠であった。第4号は第3号発行のほぼ3年後の1983(昭和58)年7月、第5号はさらにその2年半後の1986(昭和61)年2月発行である。その約一年後の1987(昭和62)年3月に編集室最後の紀要第6号が発行され、同年4月に編集室は史料室に移行した。

²東京帝国大学五十年史 上・下. 東京帝国大学 [編]. 東京帝国大学. 1932.11

³大久保 利謙（おおくぼ としあき、1900年（明治33年）1月25日 - 1995年（平成7年）12月31日）。国立国会図書館、名古屋大学教育学部教授、立教大学文学部教授。1993年朝日賞受賞。1928年、東京帝国大学文学部国史学科卒業。東京帝国大学文学部副手として国史研究室に勤務。『東京帝国大学五十年史』編纂囑託。

⁴この時の陣笠は2011年度史料室『加藤弘之史料目録増補版』の図版に掲載されている。

⁵土田 直鎮（つちだ なおしげ、1924年（大正13年）1月16日 - 1993年（平成5年）1月24日）は、日本の歴史学者。東京大学名誉教授。元国立歴史民俗博物館長。

⁶第2代委員長 土田直鎮「百年史編集をかえり見て」『東京大学史紀要』第6号 p.55、1987.3、東京大学百年史編集室

⁷男爵山川先生伝 花見、朔己、1881-1946、花見朔己 編 故男爵山川先生記念会 1939、国立国会図書館デジタル化資料 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1058238> (2013-02-03 参照)

⁸日新館童子訓 松平 容頌（著）、土田 直鎮（翻訳）、三信図書、新装版、2008、東京、315p.

史料にみる学生生徒
—学習院アーカイブズ所蔵史料から—

桑尾光太郎

学習院は東京大学と同じ1877(明治10)年に、華族子女の教育を目的として設立され、校舎も東京大学に隣接した神田錦町に建てられた。135年余にわたる学校の歴史を示す史料を保存・活用するため、2011(平成23)年に学習院アーカイブズが発足した。所蔵資料の整理や公開にむけての準備など、まだ体制は整っていないが、すでに学校の歴史に関する多くの問い合わせが寄せられ対応に追われている。

毎年春先になると、学習院にはテレビ番組の制作担当者から、「日本で最初にランドセルを使用したのは学習院か」「そのランドセルは現存するか」といった問い合わせがやってくる。日本かばん協会ランドセル工業会のホームページには、学習院が明治18年に「軍用の背のうに学用品類を詰めて通学させることになりました。この背のうがオランダ語で“ランセル”と呼ばれていたことから、やがて“ランドセル”という言葉が生まれ(略)現在に至るまで受け継がれています」と紹介されている。その根拠となる史料は、1885(明治18)年5月4日に出示された下記の掲示で、学習院アーカイブズ所蔵の「教務課日記」に記されている。掲示が出る以前から一部の生徒はランドセルを使用していたようだが、学校としてランドセルの着用を指示した記録としては最も古いものである。

生徒携帯之物入、行々欧州尚武之国之風ニ倣ヒ歩兵用ラントセルノ形ニ一定致度候間、新ニ調製ノ者ハ成ルヘク本院歩兵用科用ラントセルニ改造可致候事
但シ製造望ノ者ハ本院へ申出候ハ、調製可申付候代価凡ソ二円六拾銭位

学習院に限らず、日誌は当時の学校や学生生徒の姿を記した史料としてもっとも魅力的なものであろう。筆者は前述のランドセルの史料を捜すため「教務課日記」をめくっていたところ、明治19年2月10日に記された次のような諸注意を見つけた。

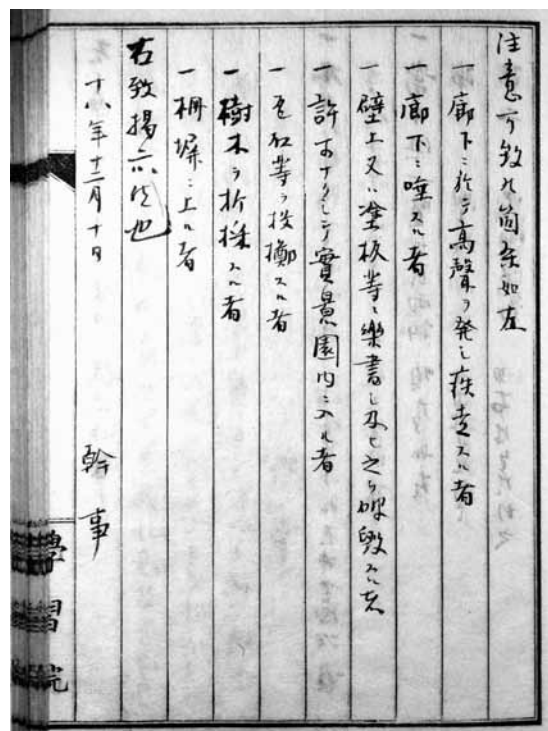
左ノ通生徒一般江相達候事
近来生徒中ニ於テ挙動静肅ナラサル者往々有之不都合ノ事少カラス候得共或ハ識ラズシテ犯セル者モ可有之歟ト被察候 因テ此節見認所ニシテ禁止スベキ箇條ヲ掲ケ候付自今能ク之ヲ慎ミ人々互ニ相責メ相戒メ犯則ニ到ラサル様精々注意可致候箇條如左

- 一 廊下ニ於テ高声ヲ発シ疾走スル者
- 一 廊下ニ唾スル者
- 一 壁土又ハ塗板等ニ樂書シ及ヒ之ヲ破毀スル者
- 一 許可ナクシテ実景園内ニ入ル者
- 一 瓦石等ヲ投擲スル者
- 一 樹木ヲ折採スル者
- 一 柵塀ニ上ル者

右致掲示候也

十八年十二月十日 幹事

奇声をあげて廊下を走ったり唾を吐いてはいかん、壁塗板に落書きをしたり壊したりするな、瓦や石を投げな、樹木を折るな、柵や塀に登るな等々の注意書きは、それだけ当時の学習院にはいたずら小僧がいたということを示し、華族ほか上流階級の子弟が集う学校のイメージとは大分様相が異なるようだ。「或ハ識



ラズシテ犯セル者モ可有之歟ト被察候」とあるように、当時の生徒が上記の行為を「悪いこと」と思っていなかったとすれば、近代の学校教育とはこういった躰から始まったことを示す史料であるかもしれない。他の学校の事例と比較してみたいところである。「実景園」が何をさすかは明らかではないが、神田錦町にあった学習院の中庭には「庭ニ皇国版図ノ実形ヲ模シ」た日本列島の模型が造築されていた。この中庭が「実景園」

であるとすれば、いたずら好きの生徒にとっては格好の標的となりかねない。

さらに同年の「教務課日記」をみていくと、下記の記載があった。

左ノ通生徒一般ニ揭示ス

今後本院内ニ於テ小学生徒ノ喫煙相禁ス事中学以上ノ生徒ハ休憩所ヲ除ク当分喫煙ヲ許サス

二月廿二日 幹事

それまで小学生が喫煙しても咎められなかったわけだから、喫煙が青少年に有害であるという認識が明治半ばの日本社会には薄かったことがわかる。同時代に活躍したピゴアの風刺画には、キセル煙管を吸う大人がしばしば描かれており、こどもも大人の影響を受けたものと思われる。史料をみると、ランドセルを背負って煙管を吸っている小学生の姿をつい想像してしまうが、実際にそうした学習院の生徒がいたかは判然としない。ちなみに未成年の喫煙が法律上規制されるのは、1900（明治33）年の未成年喫煙防止法の施行からだという。ともあれ日誌を少し繙くだけでも、学習院のみならず学校教育の歴史を考えるうえで興味深い記載がみつかる。

時代は下って1908（明治41）年、学習院の中等学科と高等学科は現在の目白校地に移転した。その時の院長は陸軍大将乃木希典で、乃木院長時代の教育方針は「質実剛健」と称される。ところが大正期の学習院の学生は、それほど「質実剛健」だったわけでもないようだ。1919（大正8）年6月の「雑記」（国会図書館憲政資料室所蔵・水野直文書）には、教室と寄宿舎の様子が次のように記されている。

教室

一、高等科ニハ欠席欠課多シ 修身 英教師ノ授業最モ芳シ

一、中等科五年級ハ優等生ノ選抜セラレテ高等科ニ入ルト復習ナリトイフ考ヨリ著シク緊張ヲ欠ク

一、職員ノ執務モ互ニ譲り合ヒシテ誠実ト認メ難シ通知簿モイマダ出来ズ（中略）

寄宿寮

一、第四寮（四年）四月第六寮ヨリ転ゼシ藤原副寮長（広島）ニハ初ヨリ反感ヲ有シテ調和ヲ欠ク

一、第五寮（三年）四月ニ第六寮ヨリ転ジテ四月葡萄酒飲ミシ者数名アリ

朝寢室（二階）ヨリ小便セシ者アリ或真面目ナル学生ヲ数名ニテ寢室ニツレ行毛布ニ包ミ縄ニテ縛シ衣ヲハギインキニテ体ニ徒書ヲ為ス

六月七日茶話会ヲ行ヒ閉会消灯後（十時ヨリ十一時トノ事）全生徒喧噪ス

依リテ翌日全部自宅謹慎ヲ命ゼラル（後略）

授業には欠席が多く緊張を欠き、教師も勤務に誠実ではない。寮では教師に反発し、酒を飲んだり2階の窓から小便をしたり、まじめな学生を簀巻きにして体に落書きをしたりと、やんちゃな学生の行状が記されている。2階からの小便や消灯後の「全生徒喧噪」は、「寮雨」「ストーム」と称され、旧制高等学校のパンカラな風習として語られるが、「ハイカラ」と目されていた学習院でも同様に行われていたようだ。

第二次世界大戦敗戦後、学習院は「華族の教育」という目的を廃し、宮内省の管轄を離れて1947（昭和22）年に私立学校として再出発を果たした。1949年には新制大学制度の発足と同時に学習院大学が開学した。同年に創刊された『学習院新聞』1号（6月27日）には、大学開学とともに初めて入学した女子学生へのインタビュー記事が掲載され、男の園に女子がやってきたことをユーモラスに伝えている。

記者「御入学おめでたうございます、まづ皆様が一番最初にお感じになつたことは」

A「教室の汚いの閉口しました」

B「余り喧しいので、聾啞学校に転校しようと思っております」

C「一般に非衛生なのに驚きました、まるで私達掃除婦と同義語ね」

一同「うなづく」

記者「それは御気の毒で、では男子の学生に関してお気付きの点は御座いませんか」

B「教室内では禁煙して頂きたいと思います」

A「窓とは随分敷居の高い出入口だということを見ました」

C「それに机や椅子はまるで踏台と同じよ」

記者「その辺で御勘弁を…」（後略）

戦後学校をとりまく環境が激変し、学習院が私立学校となっても学生のやんちゃぶりは健在だったようだ。ともすれば昔の学生は大人っぽくまじめで勉強熱心だったように思われがちだが、こうした史料にふれるとそうでもないことがわかる。そして遠い昔の学生も、身近な存在に感じることができるのである。

（くわお こうたろう：学習院アーカイブズ職員）

受贈図書一覧（抄）（平成24年8月～平成25年1月）

公文書館研修了研究論文集 平成23年度 独立行政法人国立公文書館	平成23年度	旧制高等学校記念館夏期教育セミナー 第15回, 第16回 谷本宗生	平成23年4月, 平成24年4月
アーカイブズ 第48号 独立行政法人国立公文書館	平成24年11月	旧制高等学校記念館 記念館だより 第57号, 第58号 谷本宗生	
赤門学友会報懐徳 23号 谷本宗生	平成24年9月	旧日本史残簡（東京帝国大学法科大学内部書類綴: 私製） 谷本宗生	
赤煉瓦通信 第5号 谷本宗生	平成19年5月	教育史学会 会報 No.112 谷本宗生	平成24年11月
一高同窓会通信 第10号, 第11号 谷本宗生	平成24年8月, 12月	京都大学大学文書館だより 第23号 京都大学大学文書館	平成24年10月
江戸東京博物館NEWS vol.79, vol.80 東京都江戸東京博物館	平成24年9月, 12月	屏風に名を残した教員たち：京都大学大学文書館企画展 京都大学大学文書館	平成24年11月
大阪大学文書館設置準備室だより 第11号 大阪大学アーカイブズ	平成24年9月	熊本大学60年史 部局史編 国立大学法人 熊本大学	平成24年10月
開港のひろば 第118号, 第119号 横浜開港資料館	平成24年10月, 平成25年1月	慶応義塾150年史資料集 基礎資料編1 慶應義塾福澤研究センター	平成24年10月
学習院アーカイブズ・ニューズレター 第1号 学校法人学習院 学習院アーカイブズ	平成24年9月	工学院大学学園百二十五年史：工手学校から受け継ぐ実学教育の伝統 谷本宗生	平成24年9月
「学力コンクール」の時代（1946-70）—大学入試の模擬試験 を実施した学生団体の歴史— 三上淳史（愛知教育大学教育学部学校教育講座准教授）	平成23年7月	國學院大學創立百三十周年記念事業 「国学の始祖 荷田春満資料展」 学校法人國學院大學	平成24年10月
金沢大学資料館だより 第39号 金沢大学資料館	平成24年9月	國學院大學130周年記念誌 学校法人國學院大學	平成24年11月
金沢大学資料館特別展図録 平成24年度 金沢大学資料館	平成24年10月	東海大学資料叢書1 東海大学学園史資料センター	平成24年3月
起止録 弘化四（一八四七）年（翻刻）（抜刷） 谷本宗生	平成24年3月	坂の上の雲ミュージアム企画展 第4回, 第6回 谷本宗生	平成22年3月, 平成24年2月
鴨東通信 No.86 谷本宗生	平成24年7月	渋沢研究 第25号 渋沢史料館	平成25年1月
かわら版 第169号, 第179号, 第311～316号 平成12年9月, 平成13年8月, 平成24年7月～12月	谷本宗生	青淵 第七六二～第七六七号 財団法人渋沢栄一記念財団	平成24年9月～平成25年2月
勸学院の雀 第120号, 第188号, 第189号 谷本宗生	平成16年5月, 平成12年10月, 11月	成蹊学園史料館年報 通号10号 谷本宗生	平成24年9月

絶対健康法 谷本宗生	昭和10年 6月	東京大学史料編纂所研究紀要 第22号 東京大学史料編纂所	平成24年 3月
全国学校医会状況 谷本宗生	大正 9年 3月	わだつみのこえ記念館企画展解説書・資料集 わだつみのこえ記念館	2012年 平成24年12月
一八八〇年代教育史研究年報 第四号 一八八〇年代教育史研究会	平成24年10月	平井文庫—ある蔵書（文庫）の行方・顛末—（抜刷） 小関恒雄	平成23年 6月
「1880年代教育史研究会」ニューズレター 第39号, 第40号 谷本宗生	平成24年10月, 平成25年 1月	ある医学専門学校長の晩年と死（抜刷） 小関恒雄	平成24年 7月
大学史研究通信 第40号, 第71号, 第72号 谷本宗生	平成16年 8月, 平成24年 8月, 11月	日本眼科を支えた明治の人々 谷本宗生	平成 9年 4月
大学アーカイヴズ No.47 全国大学史資料協議会東日本部会	平成24年10月	日本教育史研究 第三十一号 谷本宗生	平成24年 8月
玉川大学教育博物館 館報 第10号 玉川大学教育博物館	平成24年 8月	日本女子大学成瀬記念館展示図録 2013年 谷本宗生	平成24年
地方教育史研究 第21号 谷本宗生	平成12年 5月	教育史学会紀要 第55集 谷本宗生	平成24年10月
地方史研究 第三五八～三六〇号 谷本宗生	平成24年 8月～ 12月	佐佐木信綱記念館特別展図録 平成24年度 佐佐木信綱記念館	平成24年11月
TEXNH MAKPA 第4号 女子美術大学歴史資料室	平成24年 9月	芳賀矢一文集 谷本宗生	昭和12年 2月
東海大学学園史ニュース No.7 東海大学学園史資料センター	平成24年12月	武蔵学園史年報 第十七号 武蔵学園記念室	平成24年11月
改革試案 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）		龍南：熊本大学五高記念館ニューズレター vol. 3 谷本宗生	平成19年 6月
資料（その25, 26, 36）／東京大学広報委員会[編] 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）	昭和44年 4月, 7月	冷水養生法 六版 谷本宗生	明治39年 6月
東京大学教養学部学生課長 一鷹野次彌氏を悼む—遺稿と追憶 第一集 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）		文壇 第四十三号, 合本版（第三十一～三十五号）, 合本版（第四十一～四十四号他） 谷本宗生	明治42年 3月, 明治41年 6月, 明治42年 6月
東大教養学部教職員組合 組合ニュース 第73号, 第76号 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）	昭和43年11月, 昭和44年 5月	冷水浴の実験と學理 谷本宗生	明治40年 9月
東大電気工学科の生い立ち：諸先生のおもかげ 第1集 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）	昭和34年 3月	霞城館だより No.55 財団法人霞城館	平成25年 1月
定員外職員（臨時）問題のために 丸山剛史（宇都宮大学教育学部）			

史料室日誌抄録（平成24年8月～平成25年1月）

平成24年

- 8月9日（木） 文部省往復・データベース科学研究費打合せ（情報学環7階701号室）。
- 8月16日（木） 安田講堂改修工事に伴う移転候補先視察（柏キャンパス）。
- 8月17日（金） 安田講堂改修工事に伴う移転候補先視察（駒場キャンパス）。
- 国際資料研究所小川千代子先生との打合せ（史料室）。
- 9月5日（水） 移転作業に伴う打合せ（史料室）。
- 9月24日（月） 谷本室員、村上室員、本部事務局の防災訓練参加（山上会館前）。
- 9月26日（水） 健康と医学の博物館長大江和彦先生史料寄託打合せのため来室（史料室）。
- 国際資料研究所小川千代子先生との打合せ（史料室）。
- 10月15日（月） 移転作業に伴う打合せ（第二本部棟1階会議室）。
- 10月16日（火） 健康と医学の博物館へ病院関係史料寄託（28箱）。
- 10月18日（木） 情報学環小川ゼミ見学のため来室。
- 10月19日（金） 移転作業に伴う打合せ（史料室）。
- 10月22日（月）～10月24日（水）
- 医学部1号館1階（事務居室S109号室）への移転。
- 10月30日（火） 小川室員、移転候補先視察（柏キャンパス）。
- 11月1日（木） 大学産業医巡視訪問。
- 11月2日（金） 谷本室員、科研費(C)調査のため出張（石川県立歴史博物館）。
- 11月6日（火） 文部省往復・データベース科学研究費打合せ（情報学環本館6階実験室）。
- 11月20日（火） 『東京大学史史料室ニュース』第49号刊行、発送。
- 12月4日（火） 上山名誉教授寄贈大学改革関係資料1箱受入れ（理学部・本部教育企画室より）。
- 12月5日（水） 工学部藤井恵介先生他来室（史料室）。
- 12月8日（土） 谷本室員、坂の上の雲ミュージアムにて市民講座担当（松山）。
- 12月21日（金） 文部省往復・データベース科学研究費打合せ（情報学環7階701号室）。

平成25年

- 1月11日（木） 谷本室員、科研費(B)調査のため出張（松本市立図書館）。
- 1月19日（土） 谷本室員、旧制高等学校記念館の打合せ参加（松本）。

この間の閲覧者数

0名（安田講堂改修工事のため）

主な学外閲覧者所属機関

なし

その他

学内相談訪問者数 7名
調査（照会）件数 47件

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第50号

発行日：2013年3月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2